

七夕

平成26年7月第1週放送

七夕でまず思い浮かぶのは、織姫おりひめと彦星ひこぼしの伝説です。

天の帝みかどの娘である織姫は、働き者で、寝食を忘れるほどに機はたを織り続けていました。それをかわいそうに思った天の帝が、彦星と夫婦になることを命じます。

しかし今度は、結婚生活のあまりの幸福さに、全く機はたを織らなくなってしまった織姫を天の帝は怒り、二人を引き離し、一年に一度、七月七日の晩に会うことを許します。

この伝説をもとに、中国で、七月七日の晩に織姫に針仕事の上達を託すという、乞巧奠きこうでんという行事が生まれ、日本に伝わりました。

七夕の行事は、この乞巧奠きこうでんという行事と、古来より日本で行われていた、棚機女たなばたつめという行事が混じり合いはぐく育まれていったと考えられています。棚機女たなばたつめとは、機はたを扱う女性のことで、棚機女たなばたつめが織った布が神に捧げられました。

それが、江戸時代に庶民に伝わり、針仕事のみならず、さまざまな手仕事や習い事の上達を、七月七日の晩に願うようになり、やがて、それだけでなくさまざまな願い事を短冊に記す現在の形になったと考えられます。

さて、明治六年の旧暦から新暦への変更によって、それ以前に育まれてきた年中行事の季節感が、著しく変わることとなりました。

七夕もそのひとつで、新暦の七月七日は、まだ梅雨が明けていないことが多く、天の川をみることができないこともしばしばです。

しかし旧暦では、今の八月中旬から下旬の季節行事でした。その頃になると、天候も概ね安定し、星空を見上げることができたわけです。

七夕は新暦で営まれることが多い行事ですが、一方月遅れの旧暦に準じて行われることが多いのが「お盆」です。

そのため、今はまったく別の行事という印象が強いのですが、七夕とお盆は、旧暦においては同じ時期に行われ、密接な関係があったようです。旧暦の七月十三日から始まるお盆の準備を、七夕の日から始めたと伝えられ、七夕にはご先祖様への供養の意味もこめられていたようです。

そして、折しもこの季節は、作物が実りに向かう季節です。彦星は別名「牽牛けんぎゅう」、
「牛」を「牽ひ」くと書く通り、農耕をつかさどるといわれています。七夕には、豊

作を祈る要素もあるのです。

七夕は、東アジアのさまざまな文化が混じり合った行事です。

そこには、ご先祖様や私たちを育む自然をはじめとした、いのちの^{みなもと}源への感謝の気持ち、そして、手仕事や習い事の上達を願う精進のところが息づいているといえるのではないのでしょうか。

— 終 —